

No.4 (元総社・東地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：20 種（繁殖期（初夏）：15 種、越冬期（冬季）：17 種） ・確認種数は 2 期合計で、2 番目に少なかった。
重要種	○重要種数：－
外来種	○外来種数：2 種（カワラバト、ホンセイインコ）
特筆すべき点	－
確認状況と 環境との関連	・滝川は流れが比較的緩やかであり、礫質の中州が点在し、草地も僅かに存在する。水面や中州ではカルガモやクサシギ（範囲外・時間外）、セキレイ類を確認した。 ・本地点は、まとまった樹林がないため、森林に生息する種は少ない。 ・染谷川沿いの草地や、田畑など、住宅地としては複数の環境があるが、個々の環境要素が小さく人間活動の影響を受けやすいことが懸念される。野鳥の種構成や生息数は安定的とはいえない。    住宅地 滝川 田畑

No.6 (南橘地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：27 種（繁殖期（初夏）：16 種、越冬期（冬季）：23 種）
重要種	○重要種数：1 種（オオタカ）
外来種	○外来種数：2 種（カワラバト、カオジロガビチョウ）
特筆すべき点	－
確認状況と 環境との関連	・橘山を中心に、樹林や耕作地の占める割合が大きく、ホオジやヒバリなどを確認した。 ・桃ノ木川ではオオタカがコガモを狙う様子を確認した。 ・カオジロガビチョウは、繁殖期には 11 羽、越冬期には 5 羽を確認し、ウグイスは越冬期に 1 羽確認した。 ・里山的な自然環境が残っており、野鳥の種構成や生息数は比較的安定していると考えられる。    橘山 耕作地 桃ノ木川

No.8 (芳賀地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：27 種（繁殖期（初夏）：13 種、越冬期（冬季）：24 種） ・確認種数は、No.11 と同様に越冬期で最も多かった。
重要種	○重要種数：－
	○外来種数：3 種（コジュケイ、カワラバト、カオジロガビチョウ）
特筆すべき点	－
確認状況と環境との関連	・沼や溜池では、カイツブリやカワセミ、カモ類などを確認した。 ・藤沢川両岸が耕作地となり河岸段丘林が隣接する多様な環境となっており、ノスリ（範囲外・時間外）やツグミ、キジ、セキレイ類などが確認された。各種の個体数が多く中型猛禽類の好餌環境となっている。 ・カオジロガビチョウは、繁殖期に 13 羽を確認したが、ウグイスは確認されなかった。 ・蛍大橋周辺は沼や溜池、耕作地、広葉樹林、小川など、多様な環境を有しており、野鳥の種構成や生息数は比較的安定していると考えられる。    樹林と田畑 藤沢と河畔林 藤沢川と耕作地

No.9 (本庁地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：28 種（繁殖期（初夏）：11 種、越冬期（冬季）：22 種） ・確認種数は、夏季で最も少なかったが、2 期合計で、2 番目に多かった。
重要種	○重要種数：－
外来種	○外来種数：1 種（カワラバト）
特筆すべき点	－
確認状況と環境との関連	・市街地の中心部であるが、通年で 31 種を確認した。これは、調査ルート西端に利根川河川敷周辺の環境を含んでいるためと考えられる。 ・前橋公園の池にヒドリガモ（範囲外・時間外）やオナガガモ（範囲外・時間外）を確認。 ・利根川河川敷にアカゲラやモズ、水面にコガモやカワアイサ、カンムリカイツブリ等を確認した。また、住宅地ではキジバトやジョウビタキを確認した。 ・市街地であるため、環境の多様性には欠けるものの、それぞれの環境要素で鳥類の利用を確認した。これは、利根川周辺の環境が良好であることも影響しており、野鳥の種構成や生息数は、比較的安定していると考えられる。    市街地 利根川 1 利根川 2

No.11 (桂萱・永明・城南地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：27 種（繁殖期（初夏）：15 種、越冬期（冬季）：24 種） ・確認種数は、No.8 と同様に越冬期で最も多かった。
重要種	○重要種数：1 種（ハイタカ）
外来種	○外来種数：3 種（コジュケイ、カワラバト、カオジロガビチョウ）
特筆すべき点	—
確認状況と 環境との関連	・最南端は広い草地で、段丘には広葉樹林を有している。ここではカケスやウグイス、モズ、メジロ、ツグミなど林縁環境を好む種が確認された。樹林はトビの集団ねぐらとして利用されていた。 ・萩窪城跡の谷地にはヨシ、ガマ類の湿地性植物が茂り、カシラダカの越冬個体群を確認した。隣接する樹林ではシメやエナガ、カラ類など森林性の種を多数確認し、生態系の頂点に立つ猛禽類のハイタカやノスリも確認した。 ・カオジロガビチョウは、繁殖期には 6 羽、越冬期には 2 羽を確認し、ウグイスは越冬期に 5 羽確認された。また、越冬期の調査時間外に 11 羽のカオジロガビチョウの越冬集団を確認した。 ・樹林地、耕作地、湿地と多様な環境がバランス良く構成されており、野鳥の種構成や生息数は安定していると考えられる。    林縁部と草地 萩窪城跡樹林 畦道

No.12 (桂萱・永明・城南地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：25 種（繁殖期（初夏）：17 種、越冬期（冬季）：22 種）
重要種	○重要種数：1 種（オオバン）
外来種	○外来種数：2 種（カワラバト、カオジロガビチョウ）
特筆すべき点	—
確認状況と 環境との関連	・荒砥川沿いに池や畑、樹林が広がり、畑ではトビやアオサギ、ヒバリ、ツグミ等を確認した。また、川沿いや池では、オオバンやアオジ、イソシギ（範囲外・時間外）を確認した。 ・カオジロガビチョウは、繁殖期、越冬期共に 1 羽を確認したが、ウグイスは確認されなかった。 ・住宅地であるため、やや多様性に欠け、野鳥の種構成や生息数には偏りが生じていると考えられる。    荒砥川 笹藪 耕作地

No.15 (上川淵・下川淵地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：18 種（繁殖期（初夏）：13 種、越冬期（冬季）：13 種） ・確認種数は、2 期合計で最も少なかった。
重要種	○重要種数：1 種（オオタカ）
外来種	○外来種数：1 種（カワラバト）
特筆すべき点	—
確認状況と 環境との関連	・樹林ではツグミやコゲラ等を確認し、広瀬川沿いはセグロセキレイやカルガモ等が採餌をしていた。果樹園や畑ではカワラヒワやジョウビタキ（範囲外・時間外）等が確認された。 ・住宅地と耕作地がモザイク状に分布しており、環境の多様性に欠け、野鳥の種構成や生息数には偏りがある。    果樹園 針葉樹林 河川

No.18 (大胡地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：27 種（繁殖期（初夏）：15 種、越冬期（冬季）：22 種）
重要種	○重要種数：— ・時間外もしくは範囲外で重要種のオオバンを確認した。
外来種	○外来種数：2 種（ガビチョウ、カオジロガビチョウ）
特筆すべき点	・本地点では、特定外来生物のガビチョウとカオジロガビチョウの 2 種を確認した。
確認状況と 環境との関連	・寺沢沼では、ミコアイサ（範囲外・時間外）やホシハジロ（範囲外・時間外）、アオサギ等の水鳥やカワセミを確認した。寺沢川は水量も少なくコンクリートの三面張りとなっている所も多く、水辺に生息する種は確認されなかった。また、カイツブリは幼鳥を確認し、オオバン（範囲外・時間外）は 2 羽確認した。 ・樹林では、メジロやヒヨドリ、畑地ではホオジロ、ツグミなどを確認した。 ・ガビチョウは繁殖期に 3 羽、カオジロガビチョウは、繁殖期に 37 羽、越冬期に 30 羽を確認し、両種は調査地区全域で 2 期合計 70 羽確認した。一方、ウグイスは繁殖期には 9 羽、越冬期には 1 羽の確認であり、越冬期には寺沢沼の樹林地でしか確認されなかった。 ・河川や沼、田畑、沼に隣接する落葉広葉樹林など、環境に多様性があり、鳥類の種構成や生息数は安定していると考えられる。    樹林 田畑 寺沢沼

No.20（宮城地区）

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：25 種（繁殖期（初夏）：22 種、越冬期（冬季）：8） ・確認種数は、冬期では最も少かった。
重要種	○重要種数：3 種（カッコウ、ジュウイチ、キバシリ）
外来種	○外来種数：－
特筆すべき点	・本地点では、托卵を行うカッコウ、ジュウイチを確認した。
確認状況と 環境との関連	・今回の調査地点の中で、2 番目に標高が高い。調査ルート在林道周辺には、落葉広葉樹林が主に広がっている。こうした環境を反映し、森林やその周辺を主な生息環境とする鳥類が、種数・個体数とも全体の約 9 割を占めている。 ・ジュウイチ等のカッコウ類、アカゲラ等のキツツキ類、よく茂った樹林を好むオオルリやキビタキ、針葉樹林を好むキバシリ、沢沿いの落葉広葉樹林を好むエゾムシグイやゴジュウカラ、林床にササ藪の広がる環境を好むウグイスやヤブサメなどを確認した。枯れ木が比較的多く見られ、キツツキ類は、今回調査で確認した計 3 種すべてを確認した。 ・落葉広葉樹が多く森林内の多様性に欠けるが、繁殖期はカッコウ類に加え、托卵対象種のオオルリやコルリが飛来しており、豊かな生息環境が確認された。また、越冬期の確認個体数は最も少なかった。これは高標高地であるため、鳥類がより温暖で過ごしやすい低標高地に移動した後だったためと考えられる。    笹藪 乏しい植生 冬季の広葉樹林

No.22 (宮城地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：25 種（繁殖期（初夏）：19 種、越冬期（冬季）：16 種）
重要種	○重要種数：－
外来種	○外来種数：2 種（コジュケイ、カオジロガビチョウ） ・時間外もしくは範囲外で外来種のガビチョウを確認した。
特筆すべき点	・本地点では、特定外来生物のガビチョウ（範囲外・時間外）とカオジロガビチョウの 2 種を確認した。
確認状況と 環境との関連	・荒砥川沿いに杉林や畑、落広林、草地が広がっており、畑ではスズメやカワラヒワ、沢沿いではカワガラスやセキレイ類を確認した。 ・ガビチョウ（範囲外・時間外）は繁殖期に 2 羽、カオジロガビチョウは、繁殖期に 18 羽、越冬期に 9 羽を確認し、両種は調査地区全域で 2 期合計 29 羽確認した。一方、ウグイスは繁殖期には 4 羽が確認された。 ・高標高地であるが、越冬期の種数は繁殖期と変わりが無かったことから、1 年を通して生息環境が安定していると考えられる。    スギ植林 荒砥川沿い 広葉樹林

No.24 (粕川地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：27 種（繁殖期（初夏）：15 種、越冬期（冬季）：23 種）
重要種	○重要種数：－
外来種	○外来種数：2 種（コジュケイ、カオジロガビチョウ） ・時間外もしくは範囲外で外来種のカワラバトを確認した。
特筆すべき点	－
確認状況と 環境との関連	・粕川沿いに住宅地と畑、杉林等が広がり、住宅地ではカワラヒワやヒヨドリ等が探餌し、沢沿いにセグロセキレイやキセキレイ、ジョウビタキ等が探餌していた。 ・畑では、ノスリやカワラヒワ、ツグミ、カケス等が探餌し、樹林ではオナガやホオジロ、シメ等が確認された。 ・カオジロガビチョウは、繁殖期に 9 羽、越冬期に 6 羽を確認したのに対して、ウグイスは確認できなかった。    河川 耕作地 住宅地

No.25 (富士見地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：29 種（繁殖期（初夏）：22 種、越冬期（冬季）：12 種） ・確認種数は、繁殖期と 2 期合計で共に最も多かった。
重要種	○重要種数：1 種（コサメビタキ）
外来種	○外来種数：－
特筆すべき点	－
確認状況と 環境との関連	・今回の調査地点の中で、最も標高が高い。赤城白川沿いには河畔林が、道路沿いには針広混交林が広がっている。こうした環境を反映し、森林やその周辺を主な生息環境とする鳥類が、種数・個体数とも全体の 8 割以上を占めている。 ・よく茂った樹林を好むキビタキやゴジュウカラ、サメビタキ、猛禽類のノスリなどを確認した。また、比較的枯れ木が多くみられ、キツツキ類は今回調査で確認した計 3 種すべてを確認した。 ・越冬期の確認個体数が、調査した 14 地点中、No.20 に次いで 2 番目に少なかった。これは、No.20 と同様、高標高地であるため、鳥類が、より温暖で過ごしやすい低標高地に移動した後だったためと考えられる。  大沼周辺  広葉樹林（越冬期）  道路沿いの斜面林

No.27 (富士見地区)

項 目	確認状況
確認種数	○確認種数：25 種（繁殖期（初夏）：12 種、越冬期（冬季）：21 種）
重要種	○重要種数：－
外来種	○外来種数：1 種（ガビチョウ）
特筆すべき点	－
確認状況と 環境との関連	・調査値ではほぼ全域がスギの植林で、その林床はササに覆われている。このため、樹林を好むヤマガラやシジュウカラ、ササ藪や草地を好むウグイスやアオジ等が確認された。また、畑地や草地ではツグミやカシラダカ、上空でノスリが確認された。 ・外来種はガビチョウが繁殖期に 3 羽、越冬期に 1 羽確認された。ウグイスは繁殖期に 5 羽、越冬期に 4 羽確認し、調査範囲外も含めて全域で生息が確認された。 ・スギ植林とササが大半を占め、生息環境に多様性はないものの、少ない畑地や林縁部を利用する種もみられた。  スギの植林地  広葉樹  道路沿いの斜面林

4. 過去の調査結果との比較

今回の調査結果を、前橋市が行った過去の調査結果と比較・分析します。

4.1 これまでの調査状況

前橋市がこれまで実施した調査の状況を、表 4.1-1 に整理しました。

調査回によって、調査時季や回数、調査地点が異なるため、過去の調査結果と比較する際には、これらの調査状況の違いを考慮して比較する必要があります。

表 4.1-1 これまでの調査状況

調査回	調査時季・調査日		調査地点																										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
基礎調査 (旧市域)	夏	H9.8.19~20	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
		8.26~28	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
	秋	H9.10.26~29	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
	冬	H10.1.27~31	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
基礎調査 (大胡・宮城・粕川)	春	H10.5.10~13	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
	初夏	H17.6.15~16																		●	●		●	●	●	●			
基礎調査 (富士見)	秋	H17.10.13~14																		●	●		●	●	●	●			
	初夏	H22.6.10~11																									●	●	●
平成15年度調査 (旧市域)	冬	H22.12.20~21																									●	●	●
	初夏	H15.6.9~10		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●										
平成20年度調査 (富士見地区以外)	冬	H16.1.6~7		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●										
	初夏	H20.5.31~6.1		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●		●		●		●				
前回調査 (全市域)	冬	H21.1.5~6		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●		●		●		●				
	初夏	H26.6.1~3		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●		●		●		●			●	
今回調査 (全市域)	冬	H26.12.15~17		●	●		●		●		●	●			●	●		●	●		●		●		●			●	
	初夏	R1.6.1~7	●			●		●		●	●		●	●			●			●		●		●		●	●	●	●
	冬	R1.12.17~22	●			●		●		●	●		●	●			●			●		●		●		●	●	●	●

注) 平成 17 年度の基礎調査(大胡・宮城・粕川地区)では、冬季調査を行っていません。また、地点 No. 20 では、鳥類の調査が行われていません。この他、宮城地区の管広沼、粕川地区の大林沼(室沢新沼)でも調査が行われていますが、ここには記載していません。

4.2 比較・分析結果及び考察

(1) 比較・分析の手法

比較・分析は、以下の観点で行いました。この他にも適宜、過去の確認種及び確認状況を精査しました。

- ① 確認種数の経年変化
- ② 主な生息環境別の「確認種数の割合」及び「個体数優占度」
- ③ 個体数上位 10 種及びその他の種の個体数優占度
- ④ 重要種の確認状況
- ⑤ その他確認種の変化

なお、今回調査は調査場所が過去に実施した「旧市域」での基礎調査と No.20 以外は同様の「調査地点番号」となっている為、調査結果は以下の 2 パターンでの比較・分析を行いました。(表 4.2-1)

- ・ 同一の「調査地点番号」
- ・ 同一の「調査地域区分」(同一の「調査地域区分」がない場合及び、同一の「調査地域区分」よりも今回調査の場所と環境条件が類似し、近接した「調査地点番号」があると判断した場合は、そちらの調査地点番号を優先させる)

また、②～④は、基礎調査で実施した「旧市域」の個体数データの記録が残っていない為調査結果は含めていません。⑤では、今回調査で使用した重要種選定基準以外に、「第 2 回緑の国勢調査－第 2 回自然環境保全基礎調査－」(環境庁、1983)(平成 9・10 年度の旧市域の基礎調査、及び平成 15 年度調査の選定基準)及び、前橋市自然環境保全推進委員会で選定された「地域的な注目すべき鳥類」(平成 15 年度調査の選定基準)の 2 つの出典に基づく種も、併せて整理しました。

表 4.2-1 比較・分析のパターン

比較・分析対象	今回調査の調査地点番号													
	1	4	6	8	9	11	12	15	18	20	22	24	25	27
パターン 1 同一の「調査地点番号」	1	4	6	8	9	11	12	15	18	—	22	24	25	27
パターン 2 同一の「調査地域区分」	2	3	16	7	9	19	14	14	7	26	21	13	26	21

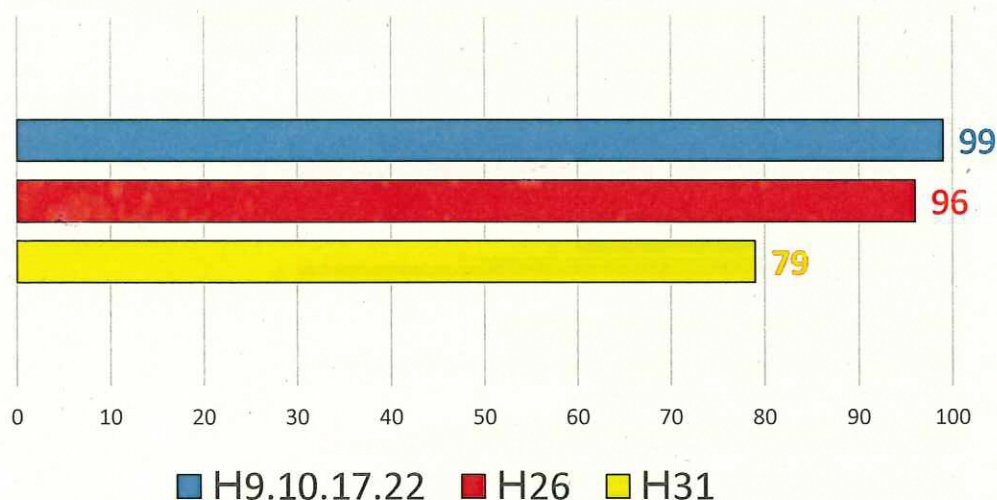
(2) 比較・分析結果

比較・分析結果の概要を、以下に示します。

① 確認種数の経年変化

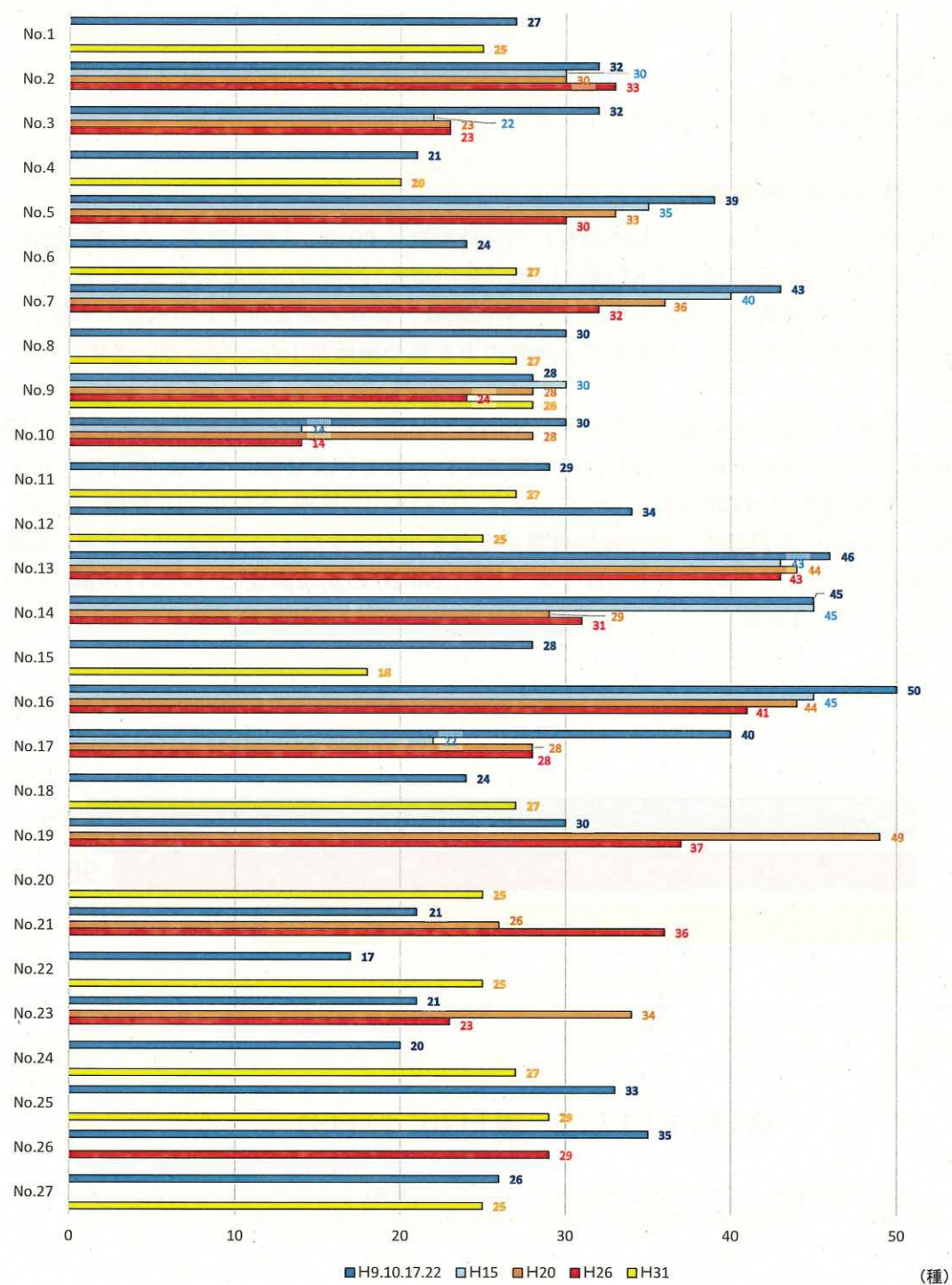
今回調査した地点における「基礎調査」の合計種数は 99 種、「前回調査」の合計種数は 96 種、「今回調査」の合計種数は 87 種でした。「今回調査」の種数が少なくなっているのは、調査地点数が「基礎調査」よりも少なく、「前回調査」よりも調査ルートが水辺から離れているからだと考えられます。そのため、水鳥のカモ類の種数が少なくなっています。(図 4.2-1)

また、大胡・宮城・粕川地区の 3 地点 (No.18、No.22、No.24) では、「基礎調査」が初夏・秋季のみで、冬鳥の確認に適した冬季調査が行われていません。このため、この 3 地点では、「今回調査」の種数が多くなっています (No.18: 15 種増、No.22: 10 種増、No.24: 9 種増)。これは「基礎調査」時の確認種数が冬鳥を中心に少なくなっており、全体の確認種数を低く抑えているためと考えられます。また、No.20 の鳥類調査については本調査が初となります。(図 4.2 2)



注) 「全体」の確認種数は、「平成 15 年度調査」及び「平成 20 年度調査」以外を示しました。これは、平成 20 年度の調査では、調査地点数 (調査範囲) が異なり、単純な比較が行えないためです。

図 4.2-1 合計確認種数の経年変化

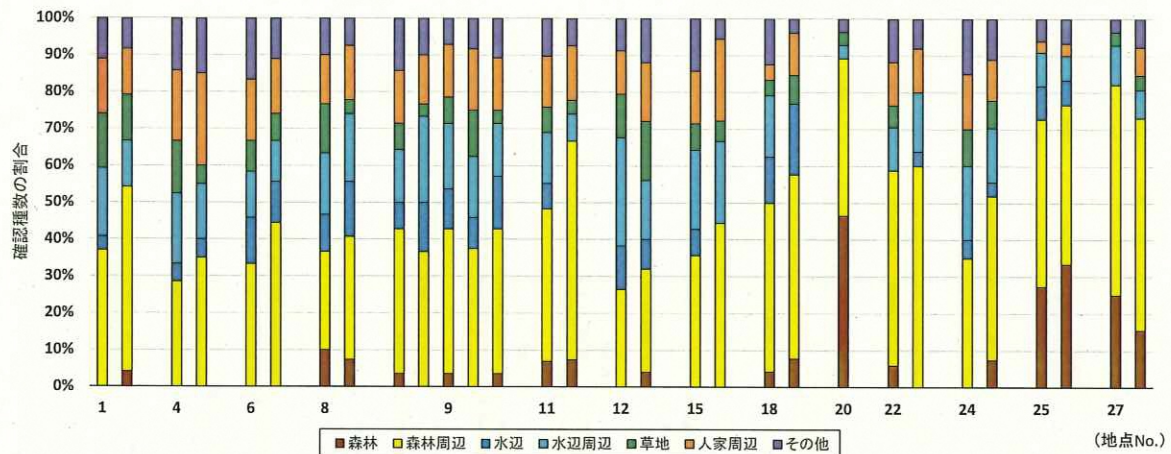


注) No. 20 については本調査が初の記録となります。

図 4.2-2 ①確認種数の経年変化

② 主な生息環境別の「確認種数の割合」及び「個体数優占度」

赤城山麓に位置し、樹林がルートの大部分を占める No.20、No.25、No.27 の3地点では、人家周辺性の種の優占度は非常に低く、「森林」や「森林周辺」の種が、7割～9割前後を占めているのが特徴的となっています。

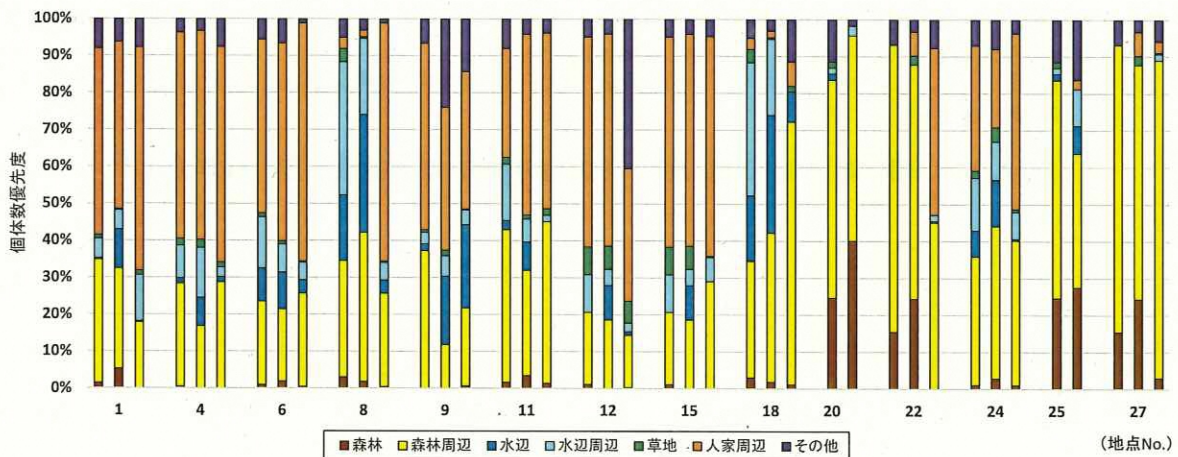


注1) 左から「基礎調査」、「今回調査」の順に並んでいます。

注2) No. 9については、左から「基礎調査」、「H15 調査」、「H20 調査」、「H26 調査」、「今回調査」の順になります。

注3) No. 20については、「今回調査」が初の記録となります。

図 4.2-3 主な生息環境別の「確認種数の割合」(経年変化)



注1) 今回調査と同一調査地点の確認種数の記録がない為、パターン2での比較・分析を行っています。

注2) 左から「H20 調査」、「H26 調査」、「今回調査」の順に並んでいます。

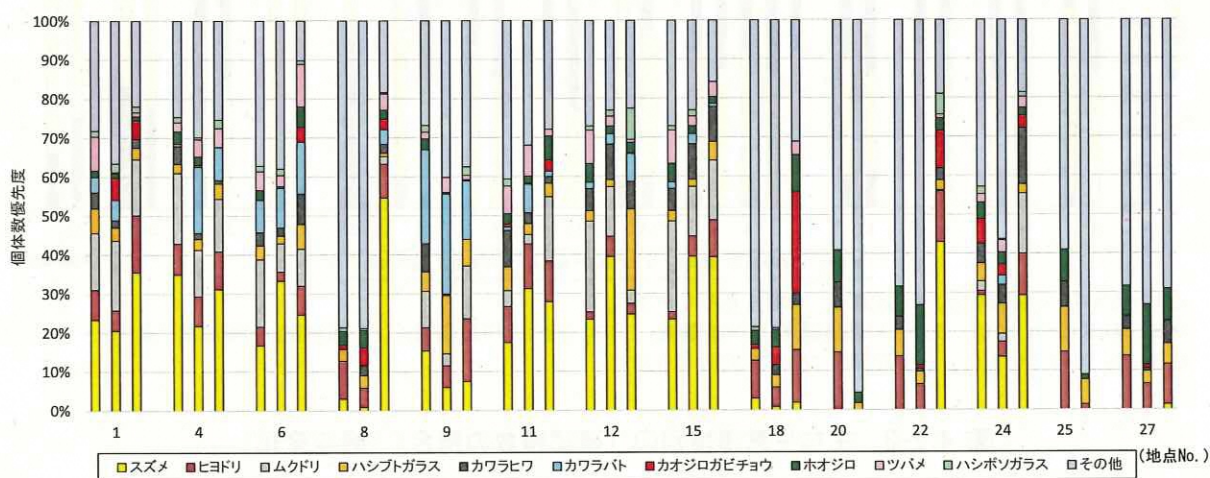
注3) 「H20 調査」については、No. 20 及び No. 25 の比較地点 No. 26 の確認種数の記録がない為、「H26 調査」のみとパターン2での比較・分析を行っています。

図 4.2-4 主な生息環境別の「個体数優占度」(経年変化)

③ 個体数上位 10 種及びその他の種の個体数優占度

今回調査した 14 地点において確認個体数の合計が上位 10 種となった種は、上から順に、スズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、ハシブトガラス、カワラヒワ、カワラバト、カオジロガビチョウ、ホオジロ、ツバメ、ハシボソガラスでした。なお、これらの種は確認地点数も 7～12 地点と、広域に分布する種でした。これら 10 種は、いずれも人家周辺の街路樹や耕作地、公園等で普通にみられる種です。

一方、赤城山麓に位置する No.20、No.25、No.27 の 3 地点は、「その他」の種の個体数優占度が、約 69～96%を占めており、住宅地周辺ではみられない森林性の種や高地特有の種が優占していると考えられます。



注 1) 今回調査と同一調査地点の確認種数の記録がない為、パターン 2 での比較・分析を行っています。

注 2) 左から「H20 調査」、「H26 調査」、「今回調査」の順に並んでいます。

注 3) 「H20 調査」については、No. 20 及び No. 25 の比較地点 No. 26 の確認種数の記録がない為、「H26 調査」のみとパターン 2 での比較・分析を行っています。

図 4.2-5 個体数上位 10 種 及び その他の種の 個体数優占度 (経年変化)

④ 重要種の確認状況

表 4.2-2 及び表 4.2-3 では、今回調査の選定基準に該当しない種（過去の調査の選定基準に該当する種）を含め、パターン1とパターン2の2つに分けて整理しました。

No.	科名	種名	重要種選定基準 ^{注2)}					清里・総社	元総社・東	南橋	芳賀	本庁	桂置・永明・城南	上川湖・下川湖	大湖	宮城		粕川	富士見		確認地点数合計	
			種の保存法	環境省RL(H24.8)	群馬県RDB(H24.12)	第2回緑の国勢調査	H15地域的な注目すべき鳥類									No.1	No.4		No.6	No.8		No.9
1	カイツブリ	カンムリカイツブリ				●						◎										1
2	ウ	カワウ					●		◎	◎	◎	●		◎					●	●		7
3	サギ	チュウサギ		NT	NT									○								1
4		コサギ			DD			○	○	○		○	○	○								7
5	クイナ	オオバン			NT									◎		△						1
6	カッコウ	ツツドリ			DD															○		1
7		ジュウイチ			NT												◎					1
8		カッコウ			NT												◎					1
9	チドリ	タゲリ			DD	●		○						○								2
10		イカルチドリ							○					○	○							3
11	カモメ	コアジサシ	国際	VU	EN							○										1
12	タカ	ハイタカ		NT	NT								◎									1
13		オオタカ		NT	NT			△		◎			○	○	◎				○			5
14	カワセミ	カワセミ					●			◎	●		○			●						4
15	キツツキ	オオアカゲラ			DD														○			1
16	ハヤブサ	チョウゲンボウ				●		○			○	○										3
17		ハヤブサ	国内	VU	DD											○						1
18	キバシリ	キバシリ			DD												◎					1
19	ヒタキ	アカハラ					●													●		1
20		コサメビタキ			DD															◎		1
21	チメドリ	(カオジロガビチョウ)					●	◎		◎	◎		●	◎		●		●	●		○	9
合計	14科	21種	2種	5種	15種	3種	4種	4種	3種	5種	4種	5種	5種	8種	3種	3種	3種	1種	3種	5種	1種	—

表 4.2-2 重要種の確認状況（パターン1の経年変化）

注1) 種の分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012年）に従った。種名に（ ）を付した種は、外来種です。

注2) 重要種選定基準

①種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年6月5日 法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種

②環境省RL(H24.8)：「環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）」（第4次レッドリストの公表について）

（環境省報道発表資料、平成24年8月発表）

③群馬県RDB(H24.12)：「群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2012年改訂版）」（群馬県、平成24年12月）

EN：絶滅危惧IB類 VU：絶滅危惧II類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

④第2回緑の国勢調査：「第2回緑の国勢調査—第2回自然環境保全基礎調査—」（環境庁、1983年）における稀少種（平成9・10年度の基礎調査及び平成15年度調査の選定基準）

⑤H15 地域的な注目すべき鳥類：平成15年度調査において「地域的な注目すべき鳥類」とした種

注3) 表中の凡例

赤字：これまで前橋市が調査した全27地点で、今回調査が「初記録」となる種

◎：今回調査で初めて確認した地点 ●：過去の調査で確認しており、今回調査でも確認した地点

○：過去の調査で確認したが、今回調査では確認されなかった地点

△：越冬期に調査時間・範囲外で確認

注4) △は各地点合計種数にはカウントしていません。

No.	科名	種名	重要種選定基準 ^{注2)}						清里・ 総社	元総社・ 東	南橋	芳賀	本庁	桂登・ 永明・ 城南	上川瀬・ 下川瀬	大胡	宮城	船川	富士見	確認地点 数合計
			文化財 保護法	種の 保存法	環境省 RL (H24.8)	群馬県 RDB (H24.12)	第2回 緑の 国勢調査	H15 地域的な 注目すべき 鳥類												
1	カモ	マガン	天然		NT	EN					○									1
2		コハクチョウ			DD	DD				○										1
3		オシドリ		DD	DD								○					○		2
4	カイツブリ	カンムリカイツブリ					●					◎								1
5	ハト	アオハト			DD											○	○		○	4
6	ウ	カワウ					●		●	●	●	●	○	●	○	○		●	◎	10
7	サギ	チュウサギ		NT	NT													○		1
8		コサギ			DD				○	○	○		○		○	○				6
9	クイナ	オオバン			NT									●	○	△		○		3
10	カッコー	ツツドリ			DD												○	○	○	5
11		カッコー			NT											◎				1
12		ジュウイチ			NT						○	○				○	◎			4
13	チドリ	タゲリ			DD		●							○	○					2
14		イカルチドリ			NT				○		○							○		3
15		コチドリ			DD						○			○	○			○		4
16	シギ	ヤマシギ			DD						○					○				2
17	カモメ	コアジサシ	国際	VU	EN				○		○		○	○						4
18	ミサゴ	ミサゴ		NT	DD									○						1
19	タカ	ハチクマ		NT	NT												○		○	2
20		ハイタカ		NT	NT								◎				○	○	○	4
21		オオタカ		NT	NT			△		●	○		○	○	●	○		○		7
22		サシバ		VU	EN						○					○				2
23	フクロウ	アオバズク			VU								○							1
24	カワセミ	カワセミ					●		○	●	●		○	○	○	●				7
25	キツツキ	オオアカゲラ			DD												○		○	2
26	ハヤブサ	チョウゲンボウ				●			○			○		○	○					4
27		ハヤブサ	国内	VU	DD											○		○		2
28	カササギヒタキ	サンコウチョウ				VU			○								○		○	3
29	ムシクイ	メボソムシクイ					●										○		○	2
30	キバシリ	キバシリ			DD											◎				1
31	ヒタキ	アカハラ					●		○	○								○	◎	4
32		コサメビタキ			DD													◎		1
33	アトリ	イスカ					●											○		1
34	ホオジロ	ノジコ			DD												○		○	2
35		クロジ			DD												○		○	2
36	チメドリ	(カオジロガビチョウ)					●	●	○	◎	●		●	◎		●	●	●	○	10
合計	23科	36種	1種	2種	10種	28種	3種	6種	5種	6種	12種	7種	5種	9種	9種	8種	7種	9種	7種	—

表 4.2-3 重要種の確認状況（パターン2の経年変化）

注1) 種の分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012年）に従った。種名に（ ）を付した種は、外来種です。

注2) 重要種選定基準

①文化財保護法：「文化財保護法」（昭和25年5月30日 法律第214号）

天然：天然記念物

②種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年6月5日 法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種

③環境省RL(H24.8)：「環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）」（第4次レッドリストの公表について）

（環境省報道発表資料、平成24年8月発表）

④群馬県RDB(H24.12)：「群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2012年改訂版）」（群馬県、平成24年12月）

EN：絶滅危惧IB類 VU：絶滅危惧II類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

⑤第2回緑の国勢調査：「第2回緑の国勢調査—第2回自然環境保全基礎調査—」（環境庁、1983年）における希少種

（平成9・10年度の基礎調査 及び 平成15年度調査 の選定基準）

⑥H15 地域的な注目すべき鳥類：平成15年度調査において「地域的な注目すべき鳥類」とした種

注3) 表中の凡例

赤字：これまで前橋市が調査した全27地点で、今回調査が「初記録」となる種

◎：今回調査で初めて確認した地点 ●：過去の調査で確認しており、今回調査でも確認した地点

○：過去の調査で確認したが、今回調査では確認されなかった地点

△：越冬期に調査時間・範囲外で確認

注4) △は各地点合計種数にはカウントしていません。

ア.) 今回調査で確認した重要種

・パターン 1

今回調査で確認した重要種は、12 種でした。そのうち、今回調査での確認地点数が少なく、減少が懸念される種（表 4.2-2：○が 2 つ以上ある確認種）は、オオタカの 1 種でした。

・パターン 2

今回調査で確認した重要種は、12 種でした。そのうち、今回調査での確認地点数が少なく、減少が懸念される種（表 4.2-3：○が 2 つ以上ある確認種）は、オオバン、カッコウ、ハイタカ、オオタカ、カワセミ、アカハラの 6 種でした。

以下に、「群馬県鳥類目録 2012」における、上記の減少が懸念される 6 種に関する記載を整理しました。（表 4.2-4）カッコウ、ハイタカの 2 種は、群馬県全域においても、減少傾向にあることがわかります。オオタカ、カワセミの 2 種は、前回調査時から減少傾向であり、その傾向が今回も継続している結果となっていますが、前橋市における減少要因が依然として明らかではありません。今後も引き続き、個体数や分布域、生息環境の変化を注視する必要があります。

表 4.2-4 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載（部分抜粋）
オオバン (群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧)	・少なくとも 1980 年代から繁殖期にも記録され、少数が繁殖していた。 ・越冬期には個体数が増加する。
カッコウ (群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧)	・個体数が著しく減少しており、分布域も縮小している。 ・特に、標高 500m 前後の山地帯下部と丘陵部での減少が著しい。
ハイタカ (群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧 環境省レッドリスト：準絶滅危惧)	・探鳥会での記録は、1990 年代後半から、特に繁殖期の記録が減少した。 ・メッシュ調査では、繁殖期の記録が著しく減少し、分布も縮小している。
オオタカ (国内希少野生動植物種 群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧 環境省レッドリスト：準絶滅危惧)	・繁殖期の記録は、1990 年頃から急激に増加したが、2000 年以降は個体数の増加は、頭打ちの状態である。 ・市街地周辺や寺社林など、小規模の緑地でも繁殖するようになったため、観察される機会が増えた。 ・しかし、このような新しい生息環境では、既に飽和状態に近いことが推測される。 ・生態系の上位に位置し、環境破壊の影響を受けやすいことを考えると、今後も保護対策が必要である。
カワセミ (平成 15 年度調査：地域的な注目すべき鳥類)	・水質汚濁や水辺環境の悪化により減少していたが、1990 年代後半から、個体数や分布域が回復してきた。
アカハラ (平成 15 年度調査：地域的な注目すべき鳥類)	・亜種の区別など不明点が多い。 ・繁殖地の一つである渋川市伊香保森林公園では、近年観察頻度が低下している。 ・2000 年頃から探鳥会での冬季の記録は増えている。

イ.) 今回調査では確認されなかった種

・パターン 1

今回調査で確認されなかったのは、9 種（表 4.2-2：○印のみの種）でした。そのうち、コサギ、イカルチドリ、チョウゲンボウを除く 6 種は、確認地点数が 1～2 地点と少ない種です。

・パターン 2

今回調査で確認されなかったのは、24 種（表 4.2-3：○印のみの種）でした。そのうち、アオバト、コサギ、ツツドリ、イカルチドリ、コチドリ、コアジサシ、チョウゲンボウ、サンコウチョウを除く 16 種は、確認地点数が 1～2 地点と少ない種です。

それらの種について「群馬県鳥類目録 2012」における記載を整理しました。（表 4.2-5(1)～(2)）

これら 16 種は、元々渡来数が少ない（あるいは変動が大きい）種、個体数が少ない種、減少傾向にある種が多いことがわかります。特に、チュウサギは、群馬県全域でも 2008 年以降に繁殖期の記録が途絶えており、今後の動向が懸念されます。

なお、マガンは、平成 9・10 年度の基礎調査で確認されていますが、渡り途中の個体の一時的な飛来と考えられます。基礎調査報告書では、「前橋市周辺に定期的な渡来地が知られていないため、迷行個体と考えられる」としています。また、サシバについても平成 20 年度の鳥類調査で確認されていますが、1 例の確認のみにとどまっている為、マガン同様渡り途中の個体の一時的な渡来と考えられます。夜行性のヤマシギやアオバズクは、通常のラインセンサス調査では確認しづらい種です。このため、過去の確認地点を中心に夜間調査を組み合わせるなど、調査方法の一部見直しにより今後確認できる可能性があります。

表 4.2-5(1) 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載（部分抜粋）
マガン （天然記念物 群馬県レッドデータブック：絶滅危惧 IB 類 環境省レッドリスト：準絶滅危惧）	・館林市多々良沼など県東部の湖沼に少数が飛来するが、記録は少ない。 ・渡り途中の個体が、県南部の休耕田に飛来した例もある。
コハクチョウ （群馬県レッドデータブック：情報不足）	・各地に少数が渡来することがあるが、希である。 ・近年、増加傾向にある。
オシドリ （群馬県レッドデータブック：情報不足 環境省レッドリスト：情報不足）	・渡来数の変動が大きい。 ・少数が繁殖する。
チュウサギ （群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧 環境省レッドリスト：準絶滅危惧）	・平野部の水田などに生息するが、多くない。 ・2000 年頃より記録が減少し、2008 年以降、繁殖期の記録が途絶えている。 ・県内の近年の繁殖状況については情報がほとんどなく、詳細は不明。

表 4.2-5(2) 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載（部分抜粋）
タゲリ (群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧 第2回緑の国勢調査：稀少種)	・主に平野部の休耕田や河川敷などに生息する。 ・小群でいることが多い。
ヤマシギ (群馬県レッドデータブック：情報不足)	・落葉広葉樹林などに生息し、休耕田などでも見られる。 ・夜行性のため、観察記録が少ない。
ミサゴ (群馬県レッドデータブック：情報不足 環境省レッドリスト：準絶滅危惧)	・県内各地の河川や湖沼に生息する。 ・冬季に平野部で記録されることが多い（県東端部での確認が多い）。
ハチクマ (群馬県レッドデータブック：準絶滅危惧 環境省レッドリスト：準絶滅危惧)	・夏鳥。個体数は多くない。 ・県内では大きな渡りの経路は発見されていない。
サシバ (群馬県レッドデータブック：絶滅危惧ⅠB類 環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類)	・主に丘陵部や山地帯下部に生息する。 ・谷津田のように、水田と林が隣接する環境を好む。 ・このような場所がゴルフ場の造成などで失われ、分布は縮小しており、個体数も減少傾向にある。 ・探鳥会の記録も1990年頃から減少している。
アオバズク (群馬県レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類)	・夏鳥。森林や寺社、公園などに生息する。 ・県下一円に普通にみられ、生息数も多かった。 ・現在では観察例は少なく、個体数が減少していると考えられる。
オオアカゲラ (群馬県レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類)	・比較的自自然度の高い森林に生息し、個体数は少ない。
ハヤブサ (国内希少野生動植物種 群馬県レッドデータブック：情報不足 環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類)	・主に河川や湖沼、農耕地などに生息する。 ・越冬期には、人工構造物を利用して、市街地に生息する個体もいる。
メボソムシクイ (平成15年度調査：地域的な注目すべき鳥類)	・山地帯上部から亜高山帯の森林に生息する。 ・渡りの時期には、平野部でも記録される。 ・繁殖期の個体数は、やや減少傾向にある。
イスカ (平成15年度調査：地域的な注目すべき鳥類)	・希な冬鳥。 ・山地の森林に渡来するが希である。
ノジコ (群馬県レッドデータブック：情報不足 環境省レッドリスト：準絶滅危惧)	・夏鳥。 ・山地帯の水辺にある疎林、林縁に生息するが、繁殖は局地的である。 ・県内では数が少なく、減少傾向にある。
クロジ (群馬県レッドデータブック：情報不足)	・留鳥・冬鳥。 ・山地帯上部から亜高山帯の森林で繁殖するが少ない。

ウ.) 減少の著しいに種について

今回調査で確認されなかった種の中で、「過去の確認地点数は多くなっていたが、今回調査では確認されなかった種」はアオバト、コサギ、ツツドリ、イカルチドリ、コチドリ、コアジサシ、チョウゲンボウ、サンコウチョウの8種になります。

「群馬県鳥類目録 2012」における、これら8種に関する記載を表 4.2-6(1)～(2)に整理しました。

この8種は、アオバトとチョウゲンボウを除き、前橋市のみならず群馬県全域で減少傾向にある種であることがわかります。特に、コアジサシは、全国的に減少が懸念されている種であり、環境省より「コアジサシ繁殖地の保全・配慮指針」(平成26年3月、環境省自然環境局野生生物課)が示されています。コサギの減少要因は定かではありませんが、生息環境や営巣地の消失、それに伴う他のサギ類等との餌競争などが挙げられています。今後も生息状況を継続的に調査する必要があります。

コアジサシの減少要因は、砂礫地(繁殖適地)の草地化や、人の河川敷等の利用による繁殖攪乱などが挙げられています。「コアジサシ繁殖地の保全・配慮指針」等にも示されているとおり、「コアジサシ飛来前に、立ち入り規制や周辺への周知を図る」、「人為的な管理により草地化を抑制する」、「繁殖実績のある場所や繁殖に適した環境の改変を避ける」などの積極的な保全対策が、今後は必要と考えます。なお、これらの対策は、同様の環境で繁殖するイカルチドリやコチドリ等の保全にもつながります。

表 4.2-6(1) 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載 (部分抜粋)	「群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(2012年改訂版)」における記載 (部分抜粋)
アオバト (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・1980年代までは県南西部に局地的に生息していたが、1990年代後半からは県北部でも記録されるようになり、分布が拡大した。 ・個体数はまだ少ないが、増加傾向にある。	・生息地は広がっているが、個体数はあまり多くない。 ・よく茂った広葉樹林に生息するため、開発による生息環境の悪化が懸念される。
コサギ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・かつては最も普通に観察されるシラサギ類であったが、2000年頃より個体数が著しく減少し、分布も縮小している。 ・他のサギ類と同様に、繁殖コロニーが悪臭と騒音によって嫌われて排除される人為的な影響の他、餌資源で競合するアオサギやダイサギ、カワウの増加も、本種が減少した一因である可能性が指摘されている。	・生息地、個体数ともに著しく減少した。 ・水質汚濁などにより、河川、湖沼、水田等の採食環境が悪化した。 ・営巣地となる林や竹藪の消失なども、減少の一因と考えられる。

表 4.2-6(2) 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載 (部分抜粋)	「群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2012 年改訂版)」における記載 (部分抜粋)
ツツドリ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・森林に生息する。 ・個体数は減少しており、分布域も縮小している。探鳥会の記録も減少傾向にある。	・生息地、個体数ともに減少している。 ・個体数は托卵対象種の個体数に依存するので、開発などによる托卵対象種の減少が危険要因となる。ただし、托卵鳥である他のカッコウ類もみな減少しており、不明な点もある。
イカルチドリ (群馬県レッドデータブック: 準絶滅危惧)	・河川敷や休耕田などに生息する。 ・近年は個体数が減少しており、分布も縮小傾向にある。河川敷の砂礫地が減少したり、草地化したりすることで、生息適地が減少していることが一因であると考えられる。	・個体数は少ない。 ・河川敷の砂礫地で繁殖するが、中洲の草地化、釣り人や車両の侵入などにより、安全な繁殖適地が減少している。
コチドリ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・休耕田や河川敷、未舗装の駐車場などでも繁殖する。 ・個体数や分布は特に変化は見られないが、近年探鳥会では繁殖期の記録が途絶えている。	・個体数は少ない。 ・河川敷の砂礫地で繁殖するが、中洲の草地化、釣り人や車両の侵入などにより、安全な繁殖適地が減少している。 ・コアジサシのコロニーに混じって繁殖することもある。
コアジサシ (国際希少野生動物種 群馬県レッドデータブック: 絶滅危惧ⅠB類 環境省レッドリスト: 絶滅危惧Ⅱ類)	・中洲や河川敷で繁殖するが、工業用造成地で繁殖した記録もある。 ・1990 年代頃までは、伊勢崎市坂東大橋周辺や前橋市大渡橋周辺など、利根川の中洲に繁殖コロニーがみられたが、2000 年代後半からは、大きなコロニーはほとんどみられなくなった。 ・中洲や河川敷の砂礫地が草地化することで、繁殖適地が減少したり、河川レジャーなどで人によって繁殖が攪乱されたり、オオタカやカラスなどによる捕食が減少の要因であると考えられる。 ・東京都森ヶ崎水再生センターの屋上(リトルターンプロジェクト)や長野県千曲川での取組みにならい、人工的に繁殖地を造成して適切に管理することで、個体数を回復できると考えられる。	・利根川など大きな河川の中洲で集団繁殖するが、近年は繁殖地の数が減少している。 ・繁殖規模も小さくなっており、繁殖しない年もある。 ・繁殖適地の消失で、個体数が減少している。 ・河川の流路の変化や植生の変化により、繁殖地は元々一定ではないが、人為的な河川管理で洪水が減少したことによる河川敷の草地化、釣り人や車両の侵入、ジェットスキーなどが、営巣放棄の原因になっている。
チョウゲンボウ (第 2 回緑の国勢調査: 稀少種)	・近年は、人工構造物を利用した市街地周辺への進出がみられる。	・近年、都市部に生息域を広げてきている。
サンコウチョウ (群馬県レッドデータブック: 絶滅危惧Ⅱ類)	・かつては普通にみられたが、1980 年代後半から 1990 年代にかけて著しく減少した。 ・近年、個体数は回復してきたが、分布はあまり回復していない。	・1980 年代から 90 年代にかけて個体数、生息地ともに著しく減少した。その後、個体数はやや回復傾向にあるが、生息地はあまり回復していない。 ・生息地が里山や低山の林野の為、ゴルフ場や住宅団地、駐車場などの造成によって生息地の消失が危惧される。

⑤ その他確認種の変化

前橋市がこれまで調査した全 27 地点において、これまでの調査では確認されておらず、今回が「初記録」となる種は、カンムリカイツブリ、ジュウイチ、エゾムシクイ、キバシリ、コルリ、サメビタキ、コサメビタキの 7 種です。「群馬県鳥類目録 2012」における、これら 7 種に関する記載を、表 4.2-7 に整理しました。種によって状況は多少異なりますが、個体数が少なく確認されづらい種や、近年分布域を拡大している種であることがわかります。

カオジロガビチョウ（特定外来生物）の確認地点数が、基礎調査では 3 地点であったのに対し、平成 20 年度調査及び平成 26 年度調査では 8 地点に増加し、今回調査でも 8 地点となっています。ガビチョウ（特定外来生物）は、平成 20 年度調査の初記録で 4 地点、平成 26 年度調査で 3 地点に続き、今回調査でも 3 地点において確認しました。今回調査で確認できた調査地点番号は、前回調査と異なる場所となっており、個体数増加・生息域拡大が懸念されます。また、これら 2 種の個体数増加・生息域拡大に伴い、生息環境が競合するウグイス等の在来種への影響が懸念されます。

表 4.2-7 「群馬県鳥類目録 2012」における記載状況

種 名	「群馬県鳥類目録 2012」における記載（部分抜粋）
カンムリカイツブリ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・ 冬鳥。県内では生息は局地的で、個体数は少ない。 ・ 主に館林市多々良沼と館林市城沼で越冬し、利根川や北橋村真壁調整池などでも稀に観察される。
ジュウイチ (群馬県レッドデータブック: 準絶滅危惧)	・ 夏鳥。山地の森林に生息する。 ・ 個体数はもともと多くなかったが、最近 20 年間は継続的な減少傾向にある。
エゾムシクイ	・ 夏鳥。山地帯上部から亜高山帯の森林に生息する。 ・ 個体数に大きな変化はないが、分布はやや拡大傾向にある。
キバシリ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・ 留鳥。山地帯上部や亜高山帯の森林に生息する。個体数は少ない。
コルリ	・ 夏鳥。主に山地帯以上の地域の森林に生息する。 ・ 分布や個体数に大きな変化はみられない。
サメビタキ	・ 旅鳥、夏鳥。渡りの時期に各地で記録がある。 ・ 県内では、片品村尾瀬などで少数が繁殖している。
コサメビタキ (群馬県レッドデータブック: 情報不足)	・ 夏鳥。丘陵部から山地帯株の森林に生息する。 ・ 2000 年ごろまでは個体数が減少し、分布も縮小していたが、近年は回復傾向にある。ただし、まだ個体数は多くない。

(3) 調査地点別の比較・分析結果

地点別の比較・分析結果は、表 4.2-8 (1)～(5)に整理しました。各地点で状況は異なりませんが、課題として以下の4点の状況が生じていると推察されます。

- ①市街地化や道路整備等による水田の減少に伴う、シギ・チドリ類やサギ類の減少
- ②市街地化・宅地化の進行に伴う、人家周辺性種の増加
- ③河川敷の草地管理や人の利用に伴う、繁殖への影響
- ④外来種の進入・定着による在来種への影響

表 4.2-8 (1) 地点別の比較・分析結果

地区	地点番号	比較		主な変化
清里・総社	No. 1	地点番号	No. 1 (H11)	・確認種数：H9. 10 以降初の追跡調査となり、27 種から 25 種へと 2 種減少している。 ・前回調査で確認されたコサギ（群馬県 RDB:DD）、タゲリ（群馬県 RDB:DD）、チョウゲンボウ（緑の国勢調査）が確認されなかった。 ・猛禽類のオオタカ（群馬県 RDB:NT）とノスリ（共に範囲外・時間外）の確認は、本地点では初記録となる。 ・カオジロガビチョウ（特定外来生物）の確認は、本地点では初記録となる。
		地域区分	NO. 2	・確認種数：過去 4 回の増減は 2～3 種にとどまっているが、今回調査では比較地点が異なることもあり、前回調査と比較して 8 種減少している。 ・猛禽類のオオタカ（群馬県 RDB:NT）とノスリ（共に範囲外・時間外）の確認は、本地点では初記録となる。 ・前回調査に引き続き、カオジロガビチョウ（特定外来生物）が確認されたことから、生息域の拡大及び定着が懸念される。
元総社・東	No. 4	地点番号	No. 4 (H11)	・確認種数：H9. 10 以降初の追跡調査となり、21 種から 20 種へと 1 種減少している。 ・前回調査で確認されたコサギ（群馬県 RDB:DD）、イカルチドリ（群馬県 RDB:NT）は、確認されなかった。 ・ホンセイインコの確認は、本地点では初記録となる。
		地域区分	NO. 3	・確認種数：基礎調査時より 12 種の減少となったが、H15 調査以降の 4 回の調査で増減は 1～3 種であり、比較的安定している。 ・以前水田や畑だった場所は、宅地化・市街地化の進行、太陽光発電パネルの設置、耕作放棄による荒地化が進んでおり、耕作地は、基礎調査時に比べ、大幅に減少している。種構成の大きな変化は現時点では生じていないと考えられるが、周辺の環境変化が著しいことから、今後も引き続き鳥類相の変化を確認する必要がある。 ・H20 調査から継続的にカワウが確認されている。 ・前回調査に引き続き、ホンセイインコが確認された。一方、前回確認されたカオジロガビチョウ（特定外来生物）については確認されなかった。

表 4.2-8(2) 地点別の比較・分析結果

地区	地点番号	比較		主な変化
南橋	No. 6	地点番号	No. 6 (H11)	・確認種数：H9.10以降初の追跡調査となり、24種から27種へと3種増加している。 ・猛禽類のオオタカ（群馬県 RDB:NT）の確認は、本地点では初記録となる。 ・赤城白川は両岸がコンクリート護岸になっていたが、河川敷が広がっている。 ・カオジロガビチョウ（特定外来生物）の確認は、本地点では初記録となる。
		地域区分	NO. 16	・確認種数：基礎調査時から年々減少している。 ・基礎調査時から大きな環境変化はないと考えられる。 ・スズメやカワラバトが微増傾向にあるが、種構成の大きな変化は生じていない。 ・基礎調査及び H15 で確認された「コアジサシのコロニー（集団繁殖地）」は、以降の調査では確認されていない。 ・前回調査に引き続き、カオジロガビチョウ（特定外来生物）が確認された。
芳賀	No. 8	地点番号	No. 8 (H11)	・確認種数：H9.10以降初の追跡調査となり、30種から27種へと3種減少している。 ・基礎調査時から大きな環境変化はないと考えられる。 ・コジュケイ、カオジロガビチョウ（特定外来生物）の確認は、本地点では初記録となる。
		地域区分	NO. 7	・確認種数：基礎調査時から年々減少している。 ・確認種の種構成に大きな変化は見られない。一方、これまでの調査で確認されていたオオタカ（群馬県 RDB:NT）やサシバ（群馬県 RDB:EN）等の猛禽類が、前回調査に引き続き確認されなかった。 ・前回調査で確認されたコジュケイ、カオジロガビチョウ（特定外来生物）は今回調査でも確認された。一方、ガビチョウ（特定外来生物）については、確認されなかった。
本庁	No. 9	地点番号・地域区分	No. 9	・確認種数：調査回によって差があるが、基礎調査時から3種増と大きな変化は生じておらず、安定している。 ・カワアイサの確認は本地点で初であり、前橋市内では H9.10 以降、約 20 年ぶりの確認となる。 ・前回調査で確認されたコジュケイについては、確認されなかった。 ・カンムリカイツブリの確認は前橋市内の調査では初記録となる。
桂萱・永明・城南	No. 11	地点番号	No. 11 (H11)	・確認種数：H9.10以降初の追跡調査となり、29種から27種へと2種減少している。 ・基礎調査時から大きな環境変化はないと考えられる。 ・猛禽類のトビ、ハイタカ（群馬県 RDB:NT）、ノスリが確認され、ハイタカ及びノスリの確認は、本地点では初記録となる。
		地域区分	NO. 19	・確認種数：調査回によって差があり、基礎調査とは等しく、H25 調査からは 10 種減となった。これは今回調査の NO. 11 は田畑が中心だったのに対して、前回調査の NO. 19 は河川沿いや樹林沿いなど、環境が多様であったことが要因だと考えられる。 ・基礎調査時から大きな環境変化はないと考えられる。 ・前回調査に引き続き、オオタカについては確認できなかった。一方、猛禽類のトビ、ハイタカ（群馬県 RDB:NT）、ノスリが確認され、ハイタカの確認は本地点では初記録となる。